

大正七年十月一日發行

金澤醫學專門學校  
十全會雜誌

第三十二卷

第十號

(第五百三十三號)

金澤醫學專門學校十全會

金澤醫學專門學校 **十全會雜誌** 第二十三卷第十號 (第五百十三號) **目次**

○原 著

○金澤病院皮膚科新來患者統計……………

森田 隆三  
田中 次一  
小出 隆次

○那々繚蟲ノ一例ニ就テ……………

佐伯 義久……………二五

○硬腦膜腫瘍(砂腫性纖維內被細胞腫)ニ就テ……………

醫學科第四年生 網村 基行……………三

○學 會

○金澤皮膚科集談會第二十二回例會……………四七

○金澤外科集談會第九回例會……………五五

○抄 録

內 科 學……………二 件……………五

細 菌 學……………七 件……………五

皮膚科及泌尿器科學……………二 件……………六

○雜 報

●東久邇宮妃殿下及阿若宮王奉迎。●一年志願兵認定入營。●官立醫學專門學校規程中改正。●金澤外科集談會第九回例會。●第五十二回金澤病院醫事集談會……………三

○叙任及辭令

●內閣。●宮內省。●賞勳局。●內務省。●文部省。●司法部。●陸軍省。●海軍省。●樺太廳。●石川縣。●金澤醫學專門學校……………四

○人 事

●加藤教授。●大脇彌平氏。●林信行氏。●松王數男氏。●南部典氏。●竹中和一氏。●富居恒松氏。●淺井貞準氏。●藤野保太郎氏。●岡島俊一氏。●中谷內善雅氏。●林謹一氏。●中村欣一郎氏。●山中進一郎氏。●増田穠氏。●下平教授母堂……………六

○會 告

●校外特別會員會費納付調書……………六



# 學 會

## ○金澤皮膚科集談會第廿二回例會（八月十二日）

### 金澤病院皮膚科新來患者統計

森 田 隼 三  
田 中 清 次  
小 出 隆 治

本院皮膚科ニ於ケル大正二年ヨリ大正六年迄ノ新患者總數九千五百七十五人ニシテ、之ヲ甲、皮膚病。乙、花柳病。丙、泌尿生殖器病及ビ爾他疾患ノ三大綱目ニ區別シテ統計ヲ作レリ。各綱目中ヨリ二三主要ナル疾患ノ數ヲ舉ゲレバ、濕疹千九百廿三人（二〇・一％）、皮膚結核四十二人（〇・四三％）、黴毒千四百八十一人（一五・四六％）、淋病千五百五十九人（一六・二八％）、軟性下疳二百二十四人（二・三四％）、膀胱炎二百三十三人（二・四三％）トス。詳細ハ本號ノ統計欄ヲ參照セラレタシ。

討論、飯森益太郎、 只今報告中ノ花柳病ニ對スル統計ハ淋病、黴毒、軟性下疳ノ順序ナルガ、斯ハ一般ノ統計即チ徵兵検査及ビ娼妓健康診斷ノ成績トハ大ニ其趣キヲ異ニセリ。余ハ今確カニ記憶セザルモ花柳病ノ數字の關係ハ淋疾、軟性下疳、黴毒ノ順序ニテ三、二、一ノ比例ニアルモノト信ズ。獨リ金澤病院ニ於テ之レニ反スルハ大病院ノ特殊關係ニ依ルナラン。

同。土肥章司、本科ノ統計中微毒患者ノ割合ガ比較的多キハ「サルワルザン」靜脈内注射及ビ血清診斷ノ關係上特ニ多ク來院スルモノト信ズ。

### 禿髮性毛嚢炎ニ就テ

石 川 濟

本症ハ比較的稀有ノ疾患ニシテ自ラ報告セラレタルモノモ少ク、我が國ニ於テハ尙ホ數例ニ過ギズ。  
本症ノ特徴トシテ、

- (一)、毛嚢及ビ其周圍ノ炎症性病變及ビ膿疱形成、
- (二)、永久ノ脫毛、皮膚癬痕組織ノ形成、
- (三)、相對性ニ發生シ、群簇シ易キ傾向、
- (四)、高度ノ自覺症狀ヲ缺キ且ツ經過緩慢。

原因ハ不明ナリ、サレドモ微體或ハ營養障礙等原因ナルモノノ如シ。最近余ノ實驗セシ一例。

濱野某女。二十歳、農、初診大正七年七月六日、生來健、著患ナシ。体格中等、營養中等、二三年前ヨリ左右耳前部ニ相對性ニ毛根ニ一致シテ限局性ニ半米粒大ノ數個ノ赤色ノ多少搔痒アル丘疹發生セシガ、或ル部ハ淺キ癬痕ヲ殘シテ治癒シ、毛髮脫落シ、或ル部ハ丘疹ノ先端ニ膿疱ヲ形成シ、中央毛髮貫通シ、僅カ炎症症狀ヲ見ル。又暗褐色ノ痂皮ヲ頂點ニ被ルアリ。而シテ患部ハ少數ノ毛髮ノ殘存ヲ見ルノミニシテ稍々耳上部ニ達セリ。

レノ——氏對側癬疽ノ一例

澤 田 一 郎

本病ハ三十歳以下ノ婦人ニ來リ易ク特ニ營養不良、貧血等ヲ有スルモノニ於テ屢々見ルコトアルハ從來報告セラレシ

所ナリ。余ハ本症ノ二例ヲ有セシガ何レモ之ニ該當セリ、但シ第一例ハ十數年前ニ實驗セシモノニ係リ詳細ヲ記憶セザルヲ以テ最近邂逅セシ一例ノミヲ報告セン。患者ハ二十三歳ノ婦人ニシテ生來虛弱、昨年十月左側肋膜炎ニ罹リ約四ヶ月間醫療ヲ受ケ其際試驗穿刺ニ依リ血性滲出液ヲ得タリシト、本年二月兩側第三趾ニ癢痒ヲ感ジ一ヶ月計リ持續セシ後一日爪爬ニ依リ表皮剝離ヲ來シ爾後三四日間該部ノ劇痛ヲ訴ヘ、次デ漸次緩解セシモ搔痕ハ却テ益々擴大シ且ツ大抵三日間計リノ間歇ヲ以テ中樞部ニ放散セル神經痛様ノ疼痛ヲ呈セリト言フ、初診ハ四月中旬ニシテ營養稍々不良、皮膚粘膜ノ血色淡ク、胸部ニ於テ肺動脈口部ニ貧血の雜音ヲ聽取スルモ心臟瓣膜ノ疾患ヲ認メズ、左胸ニハ濕性肋膜炎ノ徵アリ、尿中糖分及ビ蛋白ヲ證明セズ、ワ氏反應陰性、ビルケ反應強陽性ナリキ、足ヲ檢スルニ兩側第三趾一般ニ稍々太ク多少暗褐色ヲ帶ビ運動充分ナラズ、爪節ノ背面ニ於テ左ハ半月形、右ハ三角形ヲ呈セル潰瘍アリ表面豚脂様ノ苔ヲ被リ之ヲ剝離スレバ底面藍色ヲ呈シ知覺極テ過敏ナリ骨膜ハ侵サレズ腓骨神經ノ肥厚ヲ認メズ、爾來局所ノ鬱血症狀ハ時ニ貧血症狀ト相交代シ頗ル頑固ニ治療ニ抵抗シツツ今日ニ至ル。類症鑑別トシテ微毒、「レブラ」、糖尿病、慢性麥角中毒等ハ之ヲ否定シ得ベキモ、本症ノ發生ガ寒冷季節ナリシコト及ビ癢痒ヲ以テ起始セシ等ハ寧ろ凍瘡ヲ疑ハシム、然レドモ經過及ビ其他ノ症狀ニ依リレノ一氏病ノ診斷ヲ附シテ誤ナカルベキモノト信ズ。

追加。飯森益太郎、余ハ近頃定型的ノレノ一氏病ヲ實驗セシヲ以テ追加スベシ。患者、水橋某女、六十七歳、石川郡野村字長坂ノ住人、農業、本年五月十日孫女ガ顔面火傷ニ罹リシ爲メ、茶煎ヲ以テ頻リニ患部ヲ洗滌セシニ、同月二十日頃ヨリ本人ノ右第三、四、五指爪節藍紫色ヲ呈シ、刺痛及ビ麻痺感アリ、同二十五日ニ至リ左手第二(輕度)第三、四指(高度)爪節ニモ同一ノ變化ヲ來シ、疼痛ハ右側ヨリ甚シク夜間安眠ヲ害シ且ツ壓迫及ビ使用ニ由テ其度ヲ増加ス。當時他ニ合併症ナク、尿中糖、蛋白ヲ證明セズ。微毒血清診斷陰性(原氏法)ナリ。局部針刺ヲ試ムルモ出血セズ。處置トシテ局部溫罨法、人工太陽燈ヲ試ミシガ、七月十一日再來ノ節左第四指爪節壞疽ニ陥リ始メタリ、其後患者來院セズ。

同、森田隼三(金澤病院皮膚科)、患者吉川某女、四十九歳、無職、父ハ九十一歳ニテ健存、母ハ五年前卒中死、同胞五人、患者ハ第二女ナリ、一男ハ出産後間モナク死、其他ハ健存ス、遺傳的疾患ヲ認メズ、生來健ナラズト雖モ著患ナシ。体格中等ナレドモ營養不良ナリ、三十歳ニシテ結婚、舉子ナシ、尿中糖、蛋白ヲ證明セズ。ワ氏反應陰性ナリ、二十五年前初メテ發病シ、搔痒冷感或ハ鈍痛ヲ以テ始マル、左第一、二、三趾、右全趾及ビ左側第二、三、四指ヲ犯セリ、第二趾ハ共ニ既ニ瓜節ヲ失ヒ、左第二、三指ハ手術ニヨリテ第一、二節ヲ離斷サル、今尙ホ激痛指趾ヲ去ラズ、「レントゲン」線放射ヲ試ミタレドモ唯一回ニシテ患者再來セズ。

## 横痃手術後ニ來リシ化膿性腸腰筋炎ノ二例

澤 田 一 郎

余ハ慢性癰ニ併發セシモノ及ビ軟性下疳ニ續發セシモノ各一例ノ兩側横痃ニ於テ其手術後化膿性腸腰筋炎ヲ起シ更ニ施術ノ止ムナキニ至リシモノヲ見タリ。偶然ノ續發症ナルベシトハ思惟セルモ二回遭遇セシコトナレバ其間或ハ何等カノ關係アラシカトモ疑ハル、而シテ二例トモ腸腰筋炎ノ左側ナリシコト、横痃手術ノ切開ニ搔爬ヲ兼ネ行ヒシモノニ來リシコト、術後約一ヶ月即チ手術創ノ略々治癒セントスル時期ニ來リシコト及ビ化膿ノ轉歸ヲ取リシコト等全ク同一ナリキ。

## 非淋毒性副辜丸炎ノ三例

山 田 孝 太 郎

一、農夫、五十七歳、品行方正嘗テ遊里ニ近ヅキシコトナシ隨テ尿道ヨリ排膿セシコトナシ、七年前ヨリ尿意頻數、利尿後尿道系路ニ痛ヲ感ジ、三四年前ヨリ過度ニ勞働スルトキハ血尿ヲ出シ時トシテハ尿線中途ニ止ムト云フ。

大正六年二月六日診察、尿ハ瀾蔓性ニ溷濁ス、結石「サグリ」ニテ確ニ結石ヲ觸ル、二月十四日高膀胱切開、膀胱創開放、「ドライン管挿入、二十日「ドライン管拔去、三月一日數滴ノ尿ヲ尿道ヨリ出スノミ、同月六日及七日「ブージーレン」セシガ八日熱發、右副辜丸腫脹シ過敏、順次腫脹増加シテ鶏卵大ニ達シ、同月十九日更ニ吸収ノ徵ナキモ事故退院セリ。歸郷後村醫ノ治ヲ受ケ四月中旬波動アリ、切開ヲ受ケ治シタリ目下極メテ健康勞働ニ従事ス。

二、大工、十九歳、眞性包莖ニシテ包皮口甚シク狹窄シ、針尖大、利尿時強ク努力スルモ尿ハ包皮ト龜頭ノ間ニ蓄積シ僅ニ點滴狀ニ出ヅルノミナリト云フ、嘗テ婦人ニ接シタルコトナシ、十二三歳ノトキ副辜丸腫脹シ疼痛アリシモ數日ヲ經テ治シタリト云フ、五月一日來右側副辜丸腫脹シ痛甚シ。大正七年五月初診、熱卅八・八、尿全般ニ溷濁シ、多數ノ上皮ト「バクテリア」ヲ見ル、膿球ヲ見ズ、右副辜丸ハ鶏卵大ニ腫脹シ辜丸トノ境界不明過敏、直チニ入院瘁法臥褥ヲ命ズ、翌五日既ニ吸収ヲ初メ七日ニハ益々吸収セラレ十一日ニハ副辜頭尙ホ櫻桃大ナルモ体ト尾トハ尋常ニ復ス、熱モ八日後無熱トナル。

三、六十六歳農、嘗テ淋疾ニ罹リシコトナシ、三四年前ヨリ時々白色乳樣尿ヲ出シ本年三月頃ヨリ時々尿凝固スト云フ。大正七年七月廿二日診同夜探血「フィラリヤ」仔蟲ヲ檢出ス、廿三日試ミニ「イマミコール」三〇〇〇靜脈内注射、廿八日ヨリ右副辜丸腫脹シ、八月廿二日全ク吸収セラル、經過中廿八日ヨリ三十日ニ至ル三日間熱アリシモ其後卅七度以上ニ昇リシコトナシ、然レドモ八月十日迄尙加壓過敏ナリキ。療法ハ單ニプリスニツツ氏瘁法ヲ行ヒシノミ。

#### 大腸菌性膀胱加答兒追加

ドクトル 飯 森 益 太 郎

本病ハ稀有ノ疾病ニ非ラズト雖ドモ、實地醫家ガ膀胱カタル「ヲ診スル際毎常淋菌ニ重キヲ置キ、大腸桿菌若クハ連球菌ノ原因タルコトヲ閑却スルノ弊アリ。偶々田中清次君ガ金澤病院醫事集談會ニ於テ本症ニ自家ワクチン」ヲ





リモ温熱性ノモノ遙ニ可トス。予ハ好ンデ純沃度丁幾ヲ塗布シ、頻回交換スル硼酸ノ温罨法ヲ併用シ、常ニ優良ノ成績ヲ収メ得タリ。

其他ビール氏鬱血療法、膿栓子除去法等應用セラル。

「フルンケル」ハ輕々ニ切開セザルヲ可トス、是終生醜形ノ癍痕ヲ遺殘スルノミナラズ、稀ニハ切開ニヨリ却テ不良ノ轉歸ヲ取リ、或ハ治癒ニ長時日ヲ要スルコトアリ、又手術時及ビ其後ノ繃帶交換ノ際患者ニ苦痛ヲ與フル等ノ不利アレバナリ。但シ「フルンケル」ガ著シク増大シ且ツ發熱ノ度甚シキトキハ、十分ニ深く廣ク切開スルヲ要ス。又切開後注意シテ吸引療法ヲ行フモ可ナリ。「フルンケル」ニ壓迫ハ絕對ニ避クルヲ要ス。

前述セル治療法ニ依リ、個々ノ「フルンケル」ハ治癒スルモ、周圍ノ皮膚ニ反覆新生シ、容易ニ根治セザルコトアリ。是化膿球菌ノ附着侵入ニ因ルモノニシテ、局處ノ消毒清潔ト共ニ、爪襖衣等ノ清潔モ亦緊要ナリ。此癰腫症ハ好ンデ、項部、臀部、陰股部、腋窩等ニ發生ス。而シテ皮膚消毒トシテハ「アルコホール」、「エーテル」ニテ拭去シ、或ハ昇汞、石炭酸、撒里失兒酸ノ「アルコホール」溶液ヲ使用ス。予ハ好發部位ニ水銀石英燈ノ照射ヲ行ヒ、發生ヲ豫防シ得タルコトアリ(皮膚科雜誌十三卷九號)。全身ノ癰腫症ニハ昇汞浴(一浴中一〇瓦)、「クレオリン」浴(二〇—二五瓦)、皓礬浴(一五—三〇瓦)等使用セラル。

軟膏・硬膏或ハ罨法等ヲ長ク使用スル爲メ、該部ノ皮膚ハ濕潤軟化セラレ、抵抗力減弱シ、却テ化膿菌ノ附着侵入ヲ容易ナラシメ、「フルンケル」ガ續々新生スルガ如キ場合アリ。斯ノ如キ頑症ニ對シ、予ハ單ニ五〇%「アルコホール」罨法ヲ行ヒ極メテ佳良ノ結果ヲ収メ得タリ。

癰腫症ニ對シ「ワクチン」療法ハ屢々奏効アリ必ズシモ自家ワクチン「タル」ヲ要セズ、成ルベク多價ノ葡萄狀球菌(黃金色、橙黃色、白色)ヲ使用スルヲ可トス。最初ハ菌數一千萬ヲ注射シ、六—七日ノ間隔ヲ以テ、二千五百萬、五千萬、七千五百萬、一億ト増加シ、一億ニ達シタルトキハ、九—十日ノ間隔ヲ以テ、終ニ菌數五億ニ達セシム。

内服藥トシテ麥酒釀母(一日量五—一〇瓦)、「チミン」(三・〇)、「チョロリン」凡(三—九粒)ヲ服用スレバ、「フルンケル」ノ新生ヲ防遏シ、化膿ヲ抑制スルノ効アリトス。

予ハ最近五年間ニ實驗セル癰腫患者百四十九名、癰腫症十二名ニ對シ專ラ前述ノ非觀血的療法ヲ施行シ、幸ニ切開療法ヲ行フコト無クシテ盡ク治癒セシメ得タリ。

討論、飯森益太郎、余ハ是迄顔面フルンケル」等ニ對シ早期切開ノ方針ヲ採リシモ其結果ハ反テ不良ナリキ多年經驗上ビツク氏硬膏若クハ濃水楊酸軟膏ノ貼用及ビ硼酸水罌法等ヲ行ヒ膿栓ヲ可成早ク自然ニ脫出スル方法ヲ勤メ切開ニ因ル苦痛ト治後ノ癰痕ヲ貽サシメザル土肥博士ノ所說ニ同感ナリ又「フルンクロージス」ニ對シテハ局部ノ處置以外ニ舊來ノ硫苦運用法ヲ實施シ相當ノ成績ヲ得タリ。

### ○金澤外科集談會第九回例會 (九月十二日)

#### 一二ノ標本供覽

松 田 茂

皮膚ニ發生シタル「アンギオーム」ノ二例ニ就キ其ノ鏡檢的標本ヲ供覽セン。

病理上「アンギオーム」ニハ淋巴管腫ト血管腫トノ二種アリ、血管腫ニハ又タ單純性血管腫、海綿樣血管腫ノ別アリテ多クハ先天性ノモノナルモ稀ニハ後天性ノモノアリ、發生ノ部位ハ顔面、頸部、四肢ナルモ内臓及ビ粘膜ニモ之レヲ見ルコトアリ。

臨床上診斷ハ困難ナラズ、即チ限局セル帶紅色ノ腫物トシテ存シ壓ニ由リ退色スルモ、壓ヲ去レバ復色ス、又タ紅斑性狼瘡トハ其ノ中心部ニ癰痕樣ノ形跡ヲ存スルニヨリ、色素性母斑トハ壓ヲ加フルモ退色スルコトナキニヨリ、被

角血管腫（アンギオ、ケラトーマ）トハ上皮細胞ノ角質増殖スルヨリテ自ラ鑑別セラルベシ。

甲患者、十六歳學生、五六歳ノ頃右側胸下部ニ小ナル腫物ヲ生ジ、何等疼痛ナキモ、漸次増大ヲ來セリト。

乙患者、八歳ノ學童、四五年前ヨリ右季肋下部ニ小腫物ヲ生ジ最初疼痛ナク、増大スルニ從ヒ壓痛アリト。

兩例共ニ發生甚ダ緩漫ニシテ五年乃至十年ヲ經過シ且ツ殆ト自覺症ナク他人ニヨリ之ヲ注意セラレタル位ナリ、何レモ手術ニ由テ之レヲ摘出シ、式ニ從テ顯微鏡組織標本ヲ作成シ検査シタル結果、甲例ハ全ク海綿様血管腫ノ構造ヲ呈シ、乙例ハ殆ト脂肪腫ノ構造ヲ認メタリ。

討論、伊藤 喬、血管腫ノ療法ニ就テ、演者ノ兩例共摘出ヲ施サレタルモ、抱水コロラールノ注射ニ由テ稍、

大ナリシモノニ良結果ヲ見タル數例ヲ實驗セシコトアリト。

同上、田中一次郎、十數年前二十四、五歳ノ男子、前膊ノ下部、腕關節ニ接近シ柔軟ナル腫脹ヲ來シ皮膚ニ變色ナク一見下垂膿瘍ノ觀アリ、穿刺ヲ施シタルニ膿ヲ出サズ更ニ精檢セシニ腫脹ノ一部ニ蜿蜒タル脉管ノ擴張セシモノヲ認メ淋巴管腫ナリシヲ知り、直チニ之ヲ摘出セリ、「アンギオーム」ノ診斷並ニ治療ニ際シテハ大ニ注意ノ要スルコトアリ。

## 抄 録

## 內 科 學

○蟲樣突起炎性心窩部疼痛ノ起因ニ就テ

(醫事新聞第一〇〇五號)

隈 鎮 雄

著者ハ蟲樣突起炎ノ發作ニ際シ訴フル心窩部疼痛ノ本態ヲ闡明セントシ、先ヅ該症狀ヲ略叙シ、其成立ニ關スル二說ヲ紹介セリ。而シテ著者ハ九州大學三宅外科ニ於ケル同症患者四十九名ニツキ詳細ニ疼痛症狀ヲ聴取シ、其手術ニ際シ炎症部ノ病理解剖的變化ニ注意セリ。

其結果ニ據レバ蟲樣突起炎ノ初發症狀トシテ起ル心窩部疼痛ハ大網膜ノ該炎症ニ對スル防禦操作ニ附隨セル一現象ニシテ、其癒着セント努力スル際其附着部ニ牽引ヲ及ボシ大網膜自己ニ伸長ヲ來シ爲ニ胃ノ大彎及ビ大網膜起始部ニ疼痛ヲ來スモノナリトシ、コハ常ニ炎症ノ劇烈ニシテ少ナクトモ穿孔ノ恐レアルモノナリト想像シ得ト。又急性發作後ニ起ル心窩部鈍痛ハ專ラ大網膜癒着ノ媒介

ニヨル大彎並ニ大網膜起始部ノ疼痛ナリト。

○青森縣下ニ於ケル首下リ病ニ就テ

(臨床醫學第六年第八號)

井 上 三 郎

著者ハ青森縣三戸郡及ビ上北郡ニ於テ十七家族ニツキ三十一名ノ首下リ病患者ヲ調査セリ。其結果ヲ摘記スレバ左ノ如シ。

一、歴史。古クヨリ存在シ地方民ハ無縁佛ノ祟トセリ。  
二、地理的分布ノ狀態。低濕ノ地ニ多ク山間高燥ノ地ニ少ナシ。

三、季節トノ關係。六七月ノ交田植、田草採リノ如キ農繁期ニ最も多ク、麥收穫期(五月)及ビ米收穫期(十月)ニモ亦多シ。冬期ニ於テモ繩紉ヒ等ニヨリ起ルト。

四、年齡及ビ性的關係。特ニ認ムベキモノナシ。

五、家族の關係。著者ハ岐阜縣ニ於テ新ニ家族トナリ一箇月ニシテ既ニ發病セルモノヲ見タルガ、青森縣ニ於テハ三箇月ニテ然ルモノアルヲ見タリ。

六、生活程度。中流及ビ下流ノ上位ニアル農民ニ多ク最下層ノ農民ニ少ナシ。地方民ハ稗粟ヲ主食トス。

七、厥トノ關係。十七家族中馬ヲ飼養スルモノ十四、嘗

テ飼養セルモノ一、牛ヲ飼養スルモノ一、農事ヲナサズ馬ヲ飼養セザルモノ一ナリ。

八、家畜ノ罹病。未ダ無キガ如シ。

九、誘因。餅及ビ強飯(農繁期ニ用フト云フ)ノ食後數時間乃至二十四時間以内ニ發作ヲ來ス事最多シ。感冒ニ續發シ易ク、妊娠中ハ發作ヲ來スコトナシ。發病中生卵及ビ牛乳ヲ用フレバ緩快ス。

十、症狀。眼症狀ハ必ズシモ存セズシテ、唯發作的ニ頭首下垂ノミヲ來ス不全型アリ。症狀ノ數箇月間持續スル者アリ。間歇ノ最モ長キハ三十年間ナリシト云フ。尙ホ著者ハ青森縣ノ首下リ病ハ岐阜縣ノ夫レニ一致セリト述べタリ。

(以上二件、內科學教室橋本抄)

## 細菌學

### ○脾脫疽桿菌包膜形成ニ就テ

(日本微生物學會雜誌)

京都帝國大學醫科大學微生物學教室

關 嘉 一

著者ハ千九百十四年ロトキー氏ノ報告セル脾脫疽桿菌包膜形成誘致性物質ハ牛血清中ニ存シ、而モ濾膜分析シ得

抄 錄

ルモノナリトノ所說ノ果シテ事實ナリヤ否ヤヲ確メント欲シ該物質ノ本態ニ就キ次ノ研究ヲ企テタリ。

一、脾脫疽菌ハ牛血清中ニテ包膜ヲ形成シ得ルヤ否ヤヲ検査シテ陽性成績ヲ得タリ、是レ從來多數ノ學者ノ實驗報告ト相一致スルノ成績ナリ。

二、該菌ノ該血清濾膜分析濾液中ニテ包膜ヲ形成スルヤ否ヤヲ檢センガ爲ニ鯉ノ浮囊、「コロヂウム膜、羊皮紙ヲ用ヒテ實驗セルニ膜内液ニテハ陽性成績ヲ得、濃縮セシメタル膜外液ニテハ陰性成績ヲ得タリ。

三、溫熱、寒冷、振盪、日光、電流、鉛丹等ノ理化學的作  
用ノ該物質ニ及ボス影響ヲ檢シテ其破潰ヲ認メタリ。

四、ボニー氏ノ所說(細菌ガ人工培地上ニテ包膜ヲ形成スルモノナルモ、検査法ノ不完全ナルガ爲之ヲ證明スル能ハザリシガ之ヲ次法ニヨリテ檢スレバ容易ニ證明セラル即チ一個ノ鶏卵白ニ五十瓦ノ「グリツエリン」及ビ二滴ノ「フォルマリン」ヲ加ヘ充分振盪シ次デ濾過セル液ノ一白金耳ヲ覆蓋硝子上ニ滴下シ可檢物ヲ其内ニ混ジ薄ク塗布シ火焰上ニ加溫シ蒸氣ノ消失スル迄乾燥セシメ石炭酸フクシン液ヲ以テ染色スルコト十乃至三十秒ノ後充分水洗シ「メチーレン靑液」ニテ四乃至五分染色シ水洗乾燥セシメ「カナダバルサム」ニテ封ジテ檢

スレバ包膜ハ無色ノ輪トシテ現出スノ眞僞ヲ確メン  
ト欲シ脾脫疽菌、枯草菌、「チフス菌、橙黃色化膿球菌  
等ヲ寒天ニ培養スルコト一晝夜ノ後ボ氏法ニヨリテ染  
色セルニ菌体ノ周圍ニ無色ノ輪ヲ認メタリ。但シ該輪  
廓ハ眞正ノ包膜ナリヤ否ヤハ尙ホ今後ノ研究ニ待タザ  
ル可ラズ。

### ○平流電氣ノ補体ニ及ボス影響ニ就テ

(日本微生物學會雜誌)

京都醫科大學微生物學教室

### 三 内 健 治

補体ニ關スル從來ノ文獻ヲ觀ルニ尙ホ首肯シ難キモノ多  
シ。特ニ補体及ビ電氣ノ關係ニ於テ然リ。著者ハ這般ノ  
關係ヲ闡明ナラシメンガタメ、補体トシテハ新鮮ナル海  
獺血清ヲ用ヒ、血清ニ平流電氣ヲ通ズルニハ一定裝置  
ヲ有スルU字形硝子管ヲ用ヒテ實驗セリ。其結論次ノ如  
シ。

- 一、溶血性補体ハ平流電氣ニヨリテ其作用障害セラルル  
モ其障害ノ度ハ電氣ノ強サ及ビ量ニ正比セズ。
- 二、溶血性補体ノ電流ニ依ル障害ハ補体各成分ノ平等ナ  
ル障害ニ基ク。但シ補体第三成分ハ多少他ノ補体成分

ニ比シ抵抗方弱キガ如キモ茲ニ斷言スル能ハズ。

- 三、溶菌性補体モ試験管内ニテ平流電氣ニヨリテ障害セ  
ラル其障害ノ度ハ電氣ノ強サ及ビ量ニ正比ス。

- 四、海獺体内ノ溶菌性補体モ通電ニ依リ著シク障害セラ  
ル。

(以上二件、衛生細菌學教室高崎抄)

### ○臺北ニ於ケル腸チフス病ノ疫 學的觀察

(衛生學傳染病學雜誌第十四卷第二號)

荒 井 惠

著者ハ我邦内地ト事情ヲ異ニセル臺北市ニ於テ流行スル  
腸チフスノ精密ナル觀察ガ我海外發展策ノ參考トナル  
所大ナルヲ思ヒ同市ノ氣候、土地、飲料水、下水設備等  
ノ關係ヨリ住民ノ生活狀態、交通等ニ就キ之ヲ我内地、  
外邦各國及ビ其植民地ト比較シ疫學的觀察ヲナセルモノ  
ニテ其調査ニヨレバ同市ニ於ケル腸チフス患者數ハ種族  
別人口一萬ニ對シ内地人最小九十二、最大百三十七ニシ  
テ臺灣人ハ最小二・七、最大四五ヲ算シ、流行季節ハ二  
月、三月ニ少ク五月ヨリ上昇シツツ六月ニハ急激ニ増加  
シ、七月最多ニシテ八月以降漸次減少シ、十二月ニ又多  
少増加スルヲ見ル。其死亡率ハ明治四十四年ヨリ大正五

年迄一五〇乃至一九五％ナリシガ大正六年度ニハ急ニ増加シテ二二・二％ニ達シタリ。臺灣人ノ死亡率不定ナリ。同市ノ一部ニハ家屋ノ外觀ニ比シ裏口狹隘ニシテ衛生的設備不完全ニテ便所、炊事場、浴場等接近シ或ハ之ヲ共同ニ使用スルアリ、カカル一廓ニハ多數ノ家族の傳染ヲ見ルト云フ。又移住者ノ一般ニ衛生思想低ク、加フルニ暑氣ニヨル抵抗力ノ減退及ビ「チフス菌体外生活ニ有利ナル氣候等ガ内地ニ比シ該患者發生數ノ多キヲ致スモノナルベシト、又同市ニ於ケル防遏手段ノ概況ヲ併セ載セタリ。

### ○紡績職工ニ於ケル夜業ノ體重ニ

及ボス影響ニ就テ

(衛生學傳染病學雜誌第十四卷第二號)

香 川 斐 雄

工場ニ於ケル徹夜業ノ禁止ハ生産能率ノ二分ノ一乃至四分ノ一ヲ減ズルモノナル故、其健康ニ及ボス影響ノ程度及ビ之ヲ禁止セズシテ此惡影響ヲ除キ得ル方法ノ研究ヲ重要ナリトシ著者ハ之ヲ紡績職工ニ就キテ調査中ナルガ其體重ニ及ボス影響ニ就テノ成績ヲ第一回報告トナセルモノナリ。即チ一週間毎ニ晝業者ト夜業者ト交代スル某

紡績會社女工(一日食餌營養價平均蛋白一八・六〇八、脂肪三・九一九、含水炭素二三・六三五四、總量二五二七・三五五カロリー)三百十三名ニ就キ每交代ノ際ノ一日ノ休日ヲ利用シテ一箇年ニ涉リ注意深キ體重測定ヲナセル結果、一、紡績女工ノ夜業ハ體重ノ減少ヲ來タシ晝業ハ増量スルヲ常トスルモ稀ニハ其反對ノ場合アリ、二、夜業ノ減量ハ晝業ノ増量ヲ以テ補フ能ハズトノ斷定ハ多少考慮ヲ要ス、本試驗ハ之ニ一致セズ、三、紡績女工ハ就職後體重漸次減量スト斷定スルヲ得ズ、本試驗ハ却テ増量セリ、四、夜業ニ於ケル體重減少ハ營養品ノ増加ニ依リ幾分ハ豫防シ得ベシト結論セリ。

### ○受刑者ノ營養ニ關スル研究(第一回報告)

(衛生學傳染病學雜誌第十四卷第二號)

芥 川 信

著者ハ監獄法ノ目的ガ囚徒ヲシテ罪過ヲ改悛セシメ、健全ナル心身ヲ以テ再ビ明ルキ社會ニ勵クノ人タラシムルニアル故、其一方面タル糧食ニ於テモ健康ヲ保持スルニ必要ナル量タラザルベカラズトシ、之ヲ巢鴨監獄ニ就キ研究セルガ即チ其囚徒糧食ノ材料、貯藏法、調理法ヲ調査セル後、營養分析ヲナシ其結果、同監獄ニテ囚徒ニ給

スル糧食ハ作業時保健食トシテハ養價少ク、又東京衛戍監獄、普國監獄ノソレニ比シテ蛋白質及ビ脂肪量ニ於テ頗ル少ク、含水炭素量ニ於テ稍々多シト結論シ尙ホ之等ノ問題ハ受刑者ノ新陳代謝ノ研究ヲ遂ゲテ後一層鮮明ニスルコトヲ得ベシト述ベタリ。

(以上三件、衛生細菌學教室伊達抄)

### ○沈降反應ノ「メハニスムス」ニ就テ

(細菌學雜誌第二七四號)

京都醫科大學微生物學教室

助手 醫學士 今井 泰藏

著者ノ實驗業績ノ結論ハ左ノ如シ。

一、沈降素產生ニハ四日以上ノ潜伏期ヲ要シ沈降原ハ一定時日(十六日乃至三十二日)間沈降素ト共存シ得ルモノ也。

二、此ノ共存現象ハ又試験管内ニ於テモ之ヲ見ルコトヲ得。

三、沈降素ト沈降原ト相反應スルニハ兩者ノ量ノ多寡ニ關係セズシテ其液ノ濃度如何ニ據ルモノナリ。

四、沈降素ト沈降原トニヨリテ生ゼル沈降物ヲ以テ動物ヲ免疫セバ兩物質ハ短時間ニシテ相遊離スルモ沈降素ハ廢物トナリ沈降素性能力ヲ失ス。反之沈降原ハ分離

後モ尙ホ其能力ヲ保持シ沈降素新生ヲ促スニ至ル。

### ○結核菌部分の成分免疫實驗(第一回報告)

(細菌學雜誌第二七號)

海軍々醫少監 渡邊義政

結核菌ノ免疫元トシテ人体應用上ニ困難ナル所以ハ潰瘍形成、吸收困難、及ビ一定量以上ノ使用ニ堪エザルニヨル。著者ハ斯カル不利ナル結果ヲ生ズベキ物質(主トシテ「スクレイン酸及ビ抗酸性物質」ノ大部分ヲ、次ノ方法ニヨリ菌体ヨリ除去シテ「エムルジオン」ヲ作り之レヲ TBNo. V. ト名ヅケタリ。是レ即チ所謂氏ノ免疫元ニシテ、其ノ製法ハ結核菌ヲ「グリツェリン肉羹汁」ニ一箇月間培養セル後、滅菌濾過紙ニテ水分ヲ濾過シ去リ殘留セル菌量一〇瓦ニ對シ五%ノ苛性曹達水五〇c.c.ノ割ニ加ヘ四十八時間以上三十七度ノ孵卵器ニ入レ過剩ノ醋酸ニテ酸性トナシ「スクレオプロテイド」ヲ沈澱セシメ、更ニ醋酸ニテ酸性トナセル蒸餾水一五〇c.c.ヲ加ヘ遠心器ニテ沈澱分離セシメ尙ホ數回酸性蒸餾水ヲ以テ洗滌シタル後、此ノ沈澱物ヲ「ナトロン滴汁」ニテ中和シ更ニ生理的食鹽水ヲ以テ一定度ニ稀薄スルナリ。

蓋シ TBNo. V. 實驗成績ノ大要左ノ如シ。第一、免疫試



驗ニ於テハ「モルモット」及ビ歐洲マウス」ニ對シ結核菌ノ感染ヲ豫防シ得タレドモ（主トシテ細胞ノ自然的抵抗力ヲ増進セシムルニヨルガ如シ）第二、治療試驗ニ於テハ同上ノ結核感染動物ニ對シ效果ナキノミナラズ反ツテ不良ノ結果ヲ來セリ「 $\text{Fe}(\text{NO}_3)_3$ 」ノ注射ニヨリ「ネガチーフエファーゼ」ヲ來シ細胞ノ抵抗力ヲ減弱セシメ爲ニ病勢増惡ノ機會ヲ與ヘタルニヨル如シ）第三、然レドモ本劑ハ比較的大量（結核菌四〇ミリグラム）ニ該當スル量）ヲ用フルモ動物体ニ潰瘍ヲ形成セズ、反應性炎症少ク、又反應死ヲ惹起セズ。且ツ人体ノ治療ニ應用セルモ反應甚ダ輕微ニシテ少クトモ疾病ノ經過ヲ輕カラシムル如シ。然レドモ其ノ確實ナル效果如何ハ之レヲ他日ノ報告ニ讓ラム。

（以上二件、衛生細菌學教室黒田抄）

## 皮膚科及泌尿器科學

### ○皮膚ノ移植

（東京醫學會雜誌第三十二卷第十五號）

高橋 信 美

宮田 量之助

著者等ハ皮膚移植ニ於テ異種族移植ノ不可能ナルハ勿論

抄 錄

ナルモ自家移植ハ殆ンド常ニ成功シ同種族移植ハ人間家兎ニ於テ實驗ノ結果長キ觀察ノ後ニハ不成功ニ終ルベキコトヲ論ゼリ即チ

一、異種族移植ハ一定ノ類似ノ系統ヲ有スル植物界及ビ下等動物ノ一部ニ於テハ可能ナルコトハ既ニ知ル所ナランモ哺乳動物及ビ人類ニ於ケル相互間ノ異種移植ハ生物化學上全ク異種蛋白ニ屬シ同化シ得ザル運命ヲ有スルモノナルガ故ニ移植不可能ナルハ今更論ズル要ナシ。

二、自家移植ハ實驗ノ結果四十例ニ於テ八七五％ノ成功率ヲ示セリ。

三、同種族移植ニ關シテハ著者等ハ内外諸家ノ數多ノ例ヲ報告シ曰ク同種族移植ハ下等動物ノ一部ニ於テハ屢々成功セラルモ哺乳動物ニ於テハ未ダ闡明ノ域ニ達セズ即チ哺乳動物ニ於ケル同種族移植ハ血族の關係ナキモノハ大多數ニ於テ不成功ナルガ如ク血族の關係ノ濃厚ナルモノニ於テハ同種族皮膚移植ノ可能ナル場合アリト思考セラルトセリ、著者等ノ實驗成績ニヨレバ(1)家兎並ニ鼠ニ於ケル四十例ノ同種族移植ヲ試ミシニ外觀的治癒ハ九、四日ヲ算シ壞死ニ陷ル迄ノ日數ハ十六、九日全ク脫落又ハ痂皮下治癒ノ下ニ脫落スルハ三十日

前後ヲ要セリト故ニ血族の關係ナキ同種族移植ノ成功セリトセル報告ハ觀察日淺キ爲メナランカ？。

又家兎ニ於ケル血族間移植ハ他ノ學者ガ移植成功ト稱セラルモ著者等十例ノ實驗成績ニ於テハ陰性ナリシト云フ、而シテ此際自家移植(對照)ニ於テハ凡テ陽性ヲ示スヲ以テ手術ノ拙劣或ハ術後ノ不注意等ニ歸シ得ザルハ論ヲ俟タズサレド其術數ニ於テ尙ホ不充分ナルヲ以テ斷案ヲ下サズトセリ。

(2) 人類ニ於ケル移植、人類ニ於テ血族の關係ナキ同種移植ハ殆ンド不可能ナルモノノ如ク成功セリト見タルハ一時的ノモノニシテ早晚不成功ノ結果ヲ齎スモノナリ。即チ著者等ハ三例ノ實驗例ヲ示シテ曰ク血族の關係ノ濃厚ナル母子間及ビ血族の關係ナキ同種族移植ヲ施セルニ何レモ移植後十日間位ハ誰シモ疑フ餘地ナキ程度ニ良ク移植セラレ居リシモ(著者實驗ニテハ一例ハ十四日一例ハ十六日ノ治癒狀態ニアリ)後漸々又ハ急遽ニ壞死ヲ發現シテ何レモ痂皮脫落乃至痂皮下治癒ノ運命ニ到達セリ(著者實驗ニテハコノ狀態ニ至ルマデ十七日乃至三十日ヲ要セリ)

最後ニ家兎ノ上皮ノ生活力實驗ヲナシ保存(一定ノ方法ニヨル)十一日ノモノハ立派ニ自家移植ニ成功シ得タリ、

要之同種移植ニ於テモ肉芽乃至潰瘍面等皮膚ノ缺損部ヲ一時的被覆スルノ意味ニ於テ行フモノナランニハ是等ノ面ヲ單ニ露出スルニ比シ其治癒經過ノ良好ナルハ論ヲ俟タズ、又組織の所見ニ於テ凡テ皮膚移植ノ成功セル時ト雖モ一度角質層ハ脫落シ眞皮ニ於テハ小圓形細胞浸潤乃至血管怒張等ヲ見ルモ常ニ再ビ再生乃至新生現象ハレ上皮種子層ハ角質層ヲ發生セシメ眞皮ニ於テモ又炎症作用ニヨリ一部壞死ニ陷ルモノアルモ又通常ノ皮膚ニ復スルモノナリ。

### ○原發性膀胱筋腫ノ一例

(東京醫學會雜誌第三十二卷第十五號)

高 木 憲 三  
益 頭 尙 孝

膀胱筋腫ハ甚ダ稀ニシテ報告セラレシモ二十餘例ニ過ギズ、著者等ノ一例ハ、

五十三歳ノ下婢ニシテ遺傳的關係上注意スベキモノナク三日以來排尿時ノ疼痛下腹部緊張ノ感大腿内面ノ知覺異常ヲ以テ起リ心臟ニハ異常ナク肺ハ呼吸音粗裂ナルノミ腹部ハ膨隆シ、肝臟脾臟ヲ觸レズ、下腹部ニ疼痛抵抗アリ殊ニ恥骨縫際上ニ著シク手拳大ノ腫物ヲ觸レ膝蓋反射

消失シ尿ハ失禁シ甚シキ惡臭ヲ放ツ而モ尿中ニ腫瘍細胞ノ脂肪變性ニ陷レルモノヲ認ム、ワッセルマン反應、陰性六月十五日死亡ス、剖見上、小兒頭大ノ膀胱筋腫ヲ證シ膀胱後壁ノ粘膜下ヨリ發シ内腔ヲ充填シ、鏡見上、束狀ヲナス長紡錘形ノ筋細胞ヨリナリ核ハ卵圓形ニシテ核分裂狀ヲ示シ或ハ多核ナルモノアリ、内腔ニ向ヘル部分ハ壞死ニ陷リ肺及ビ後腹壁ニ轉移シ胃、肝臟ニ石灰沈着ヲ示シ極メテ惡性ナルヲ示ス、腫瘍ニ接セル部分ハ彈力纖維退行變性ニ陷レリ。(以上二件、皮膚科教室石川抄)

## 雜 報

●東久瀨宮妃殿下及兩若宮王奉迎

東久瀨宮殿下には曩きに歩兵第七聯隊大隊長として當第九師團に轉補遊ばされしため妃内親王殿下及兩王子殿下も御來澤の御事と相成り去月十八日午前十一時廿八分金澤驛御着に付き我金澤醫學專門學校に於ても校長以下教授諸氏は驛構内に、生徒一同は白銀町沿道に於て謹んで奉迎せり。

●一年志願兵認定入營

去月二十三日勅令第三百五十七號を以て徵兵令に依る一年志願兵に關する學校の認定及入學延期に關する件を公布來る十二月一日より施行の旨公示せられたり其要旨左の如し。

第一條 徵兵令第十三條第一項第二號の規定に依る中學校の學科程度

と同等以上の學校の認定は陸軍大臣及文部大臣之を爲す  
第二條 徵兵令廿三條第一項の規定に依る一年志願兵入營延期は左の各號に依る

(一)中學校卒業を入學程度とする修業年限三年以上の官立學校又は公立私立專門學校に在籍する者(滿廿五歲迄)

(二)中學校卒業を入學程度とする修業年限五年以上の專門學校に在籍する者(滿廿六歲迄)

(三)中學校卒業を入學程度とする修業年限六年以上の專門學校、東京高等商業學校專攻部又は帝國大學分科大學に在籍する者(滿廿七歲迄)

前項の規定は研究科選科等の別科に在籍する者には之を適用せず  
從前の規定に依り一年志願兵の資格に關し文部大臣に於て中學校の學科程度と同等以上の學校と認めたる學校は之を第一條の規定に依り認定せられたるものと看做す。

●官立醫學專門學校規程中改正

去月二十五日文部省令第十二號を以て官立醫學專門學校規程中左の通り改正せられ公布の日より施行事となり。

一、第三條醫學科學科課程表中「皮膚病學」ヲ「皮膚病學」「皮膚病學」ニ「精神病學」及「小兒科學」ノ欄ヲ左ノ如ク改メ「計」ノ欄中「二九以上」ヲ「二八以上」ニ改ム

精神病學	理論及臨床講義		一以上
	外來患者臨床講義	理論及臨床講義	不定時
小兒科學	理論及臨床講義		一以上
	外來患者臨床講義	理論及臨床講義	不定時

一、第三條第二項ノ次ニ左ノ一項ヲ加ヘ第三項ヲ第四項トス

醫學科ニアリテハ教授上特別ノ必要アルトキハ學校長ハ第一項ノ每週教授時數ノ範圍内ニ於テ第一學年ト第二學年トノ間及第三學年ト第四

叙任及辭令

學年トノ間ニ於ケル學科日又ハ其ノ教授時數ノ配當ヲ變更スルコトヲ得

●金澤外科集談會第九回例會 去月十二日午後七時より大手町醫師會堂

に於て開催左の講演ありたり。

一、一二ノ標本供覽

松田 茂君

討論、伊藤 喬君 田中一次郎君

●第五十二回金澤病院醫事集談會 全會は去月十九日午時二時より眼科

教室に於て開催、左の講演ありたり。

一、原發性肝臟癌腫ノ一例

松田 醫員

二、那々蠍虫ノ一例

佐伯 醫員

附 標本供覽

三、結核早期診斷ニ付テノ鄙見

兒玉 教授

叙任及辭令

●内閣

(八月廿六日)

兼任京都府技師

防疫官從六位勳六等 松王數男

叙高等官五等

(九月十七日)

任石川縣技師

正八位 吉田宗一

叙高等官七等

(九月十八日)

任樺太廳醫院醫官

樺太廳醫員陸軍三等軍醫 近藤勇記

叙高等官七等

●宮内省

(九月二十日)

叙正八位

森岡 收

●賞勳局

(八月二十九日)

叙勳五等授瑞寶章

從六位勳六等 松王數男

●内務省

(九月十七日)

年俸參拾圓下賜

石川縣技師 吉田宗一

●文部省

(九月十八日)

文部省學校衛生官醫學博士 北 豐 吉

山形縣へ出張ヲ命ス

●司法省

(九月十九日)

名古屋監獄勤務ヲ命ス

監獄醫(新潟) 池田 菱 吉

●陸軍省

(九月七日)

(各 通)

陸軍二等軍醫 米多外男  
陸軍二等軍醫 菱川 瀧 太

賜一等給

(九月十七日)

騎兵第十聯隊附陸軍二等軍醫 藤澤 好彦

免本職補臺灣步兵第一聯隊附

陸軍一等軍醫 中谷内善雅

依願豫備役被仰付

●海軍省●

(九月一日)

海軍大軍醫 萩野茂次郎

免横須賀鎮守府附補佐世保海軍工廠附

●樺太廳●

(九月十八日)

樺太廳醫院醫官陸軍三等軍醫 近藤勇記

五級俸下賜

●石川縣●

(九月二日)

願ニ依リ職務ヲ免ス

金澤病院醫員 林 信行

金澤病院醫員ヲ命ス、十三級俸給與

堀地四朗

内科第一部勤務ヲ命ス

(九月十日)

願ニ依リ職務ヲ免ス

金澤病院醫員 大脇彌平

金澤病院醫員ヲ命ス、十三級俸給與

明瀬太並

産科婦人科部勤務ヲ命ス

金澤病院醫員ヲ命ス、十三級俸給與

大村政一

内科第二部勤務ヲ命ス

(九月二十二日)

願ニ依リ職務ヲ免ス

金澤病院醫員 淺井貞準

金澤病院醫員ヲ命ス、十三級俸給與

西村修三

叙任及辭令

内科第一部勤務ヲ命ス

●金澤醫學專門學校●

(八月十二日)

雇由付、月俸金貳拾圓給與

鈴村小三郎

解剖學副手ヲ命ス

雇 宮野武雄

月俸金拾貳圓給與

雇 若林善太郎

依願雇ヲ解ク

(九月四日)

雇由付、月俸金貳拾圓給與

村松金次郎

解剖學副手ヲ命ス

(九月六日)

金澤醫學專門學校醫學士 安宅富太郎

眼科學副手ヲ囑託ス、月手當金貳圓給與

(九月十日)

月手當金貳拾五圓給與

金澤醫學專門學校講師 内田豐咲

(九月十二日)

依願囑託ヲ解ク

産科學婦人科學副手囑託 大脇彌平

(九月十四日)

金澤醫學專門學校醫學士 明瀬太並

産科學婦人科學副手ヲ囑託ス、月手當金貳圓給與

(九月二十一日)

金澤醫學專門學校醫學士 小池才一

内科學講師ヲ囑託ス、月手當金貳拾圓給與

# 人事

●加藤教授 藥學科教授加藤直三郎氏は時局に關し第三師團に動員令下りし爲め陸軍一等藥劑官として召集せられ西比里亞方面へ出征せられし由、遙に武運長久を祈る。

●大脇彌平氏(大正元) 金澤病院醫員として産婦人科部に在職中の處全上第三師團に陸軍三等軍醫として召集せられ既に出征の由、遙に征途多幸ならんことを祈る。

●林信行氏(大正六) 内科一部に醫員たりしが曩きに同じく赴任したる時國恒夫氏の後を追ひて神戸市立屯田療養所醫員に轉勤。

●松王數男氏(三三) 別項辭令の如く京都府技師に榮轉せられたる同氏は今回京都市上京區大宮通三條上ルに卜居。

●南部 典氏(大正七) 見習醫官志願中の處愈々許可せられ去月十一日第十師團歩兵第十聯隊(姫路)に入隊。

●竹中和一氏(全) 本校醫化學教室に研究生たりしが家事上の爲め在東京東海生命保險會社醫として就職。

●宮居恒松氏(大正六) 内科第二部の研究生たりしが今回金澤市立櫻木病院醫員に就任。

●淺井貞準氏(大正二) 卒業來内科第一部に奉職首席醫員たりしが今般其職を辭し金澤市横安江町の自宅に於て嚴父の家業を繼ぎ開業。

●藤野保太郎氏(大正七) 高岡市河合病院に勤務の處今般家事の都合により其職を辭し郷里に歸省。

●岡島俊一氏(大正六) 金澤市彦三町上田病院に勤務の處今回市立櫻木病院醫員として奉職。

●中谷内善雅氏(四一) 今回依願豫備役となりし氏は神戸市川崎造船所其合分工場醫局に勤務。

●林 謹一氏(大正四) 富山縣警察醫たる全氏は傳染病研究所に入所。

●中村欣一郎氏(四〇) 卒業後金澤病院内科第二部に醫員となり次で金澤市立櫻木病院首席醫員となり日夜職務に盡碎せられ令名高かりしが近く其職を辭し金澤市彦三町上田病院の聘に應じ勤務中の處不幸病を獲藥石其効なく終に去八月三日死去せらる茲に謹んで弔意を表す。

●山中進一郎氏(大正五) 本校細菌學教室に入り兒玉博士の下に研究し後郷里三重縣松阪病院に奉職中不幸病覺の冒す處となり去八月死去せらる茲に謹んで哀悼の意を表す。

●増田 穰氏 本會准特別會員たる氏は明治四十一年長崎醫學專門學校醫學科を卒業後福岡醫科大學耳鼻咽喉科教室に入り久保博士に就き研究中當地川北病院の聘に應じ勤務せられ爾來令名益々加はりしが俄然二賢の冒す處となり去九月十日死去せらる謹んで弔意を表す。

●下平教授母堂 本校教授下平博士母堂銀子刀自は本春來病の爲め自宅に於て療養専ら盡されしも終に去月三日永眠せらる、超へて全六日小立野棟岳寺に於て嚴かなる葬儀を施行せられ當日は本校、金澤病院職員、本校生徒を始め縣知事以下多數の會葬者ありたり。

